
まほろば（鷹取家の話）

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほろば（鷹取家の話）

【Nコード】

N7818T

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

世界で一番愛おしい兄。兄がいれば他に何も要らない。（この作品は企画より派生した作品でありブログより転載しています。「父親の肖像」<http://ncode.syosetu.com/n0785s/>克依の姉一家の話です。興味がありましたらそちらもご覧下さい。なお、暴力などの表現が含まれます。苦手な方はくれ触れもお気を付け下さい）

何かに追いかけられる夢を見る。

暗がりの中を喉が苦しくなるほど懸命に走って、追いかけて来る「あれ」に捕まらないように逃げる。

この先にあの人がいる。

そこまで逃げれば大丈夫。

彼はそれを知っていた。

その人の元まで辿り着けば、何もかも終わらせてくれる。何もかもいい方向へと導いてくれる。

後少し。

……後少しであの人の待つ場所へと辿り着けるというのに。

「……！」

いつも夢はそこで途絶える。

いつも、いつも同じところで目が覚める。

最悪な事に今日は眠りを妨害されて目が覚めてしまった。

「鷹取！ 授業を受けるつもりが無いなら教室から出て行け！」

責め立てる教師の声を聞いて淳司は彼を睨み付けた。

鋭い視線に一瞬押されるように教師の目が振れた。

高圧的に振る舞っても、この男は自分のことが怖いのだと淳司は知っている。その怯えを隠すために自分を目の敵にするように怒鳴り散らすのだ。

関わりたくなければ他の教師達のように放っておけばいい。自分はいつも教室の隅で寝ていて授業を妨害するわけでも無いのだから、他の生徒達の前で格好を付けて怒鳴り散らす必要なんて無い。

「……………」

淳司は蔑むように半笑いを浮かべる。

怯えた瞳に激しい憎悪の色が浮かんだ。
それでいい。

その方がずっと好感が持てる。

「お前、この髪の色は何だ」

ぐい、と髪を引っ張られて淳司は顔を顰める。

痛みを感じて淳司はその手をはねのけた。

「頭を触られるの嫌いなんだよ。それに染めてる訳じゃねえっての」
「嘘を付くな」

染めていないのは本当だ。

淳司の髪は兄の髪のように深い黒色をしていない。元々色素が薄
い上に塩素や日焼けですぐに色が退色してしまうのだ。そのせいで
染めていないのに茶色く見える。

何度説明しても染めていると言いつつ出す。

初めはそれでもちゃんと話した。聞いてくれないと解った瞬間に
諦めた。

頭が悪すぎていい加減イライラする。

そうやって少しずつ色々と崩れていった。あるいは最初からどこ
か狂っていたのかもしれない。

兄がいない学校。

それだけでも無意味だというのに、何故これ以上無意味なことを
言われなければいけないのだろう。

「嘘だと思うなら親父に確認してみろよ。ちゃんと確認もせずに変
な言いばかりつけてんじゃねーよ」

「鷹取っ！」

机を蹴飛ばして淳司はそのまま廊下へと出た。

出て行けと言ったのはあっちの方だ。

何もかも馬鹿で大嫌いだ。

苛立ちをぶつけるように淳司は廊下のスチール製のゴミ箱を蹴飛
ばした。

がん、と鋭い音を立ててそれは廊下に中身を散乱させた。

学校も何もかもがつまらない。

意味がない。

あの人の側にいられないなら意味がない。

「よう、鷹取イ」

声をかけられ淳司は男を睨む。

音につられて馬鹿が寄ってきた。

「ちよつと顔かせよ、どうせ暇してるんだろっ？」

「何だ、遊んで欲しいのかよ」

挑発するように笑うと、彼はむっとしたような表情を一瞬だけ作る。

それはすぐに薄い笑みでかき消された。

薄寒い、何かを思いついてしまったようなそんな笑いだった。

「そっだよ、たまには俺らと遊べよ。俺らも少し暇なんだ」

淳司は楽しそうに笑う。

「いいぜ、あそんでやるよ。その代わり、俺を楽しませろよ？」

ケンカに明け暮れるようになったのは中学に進学してからだ。

兄と同じ私立の学校へ行くはずだったが、兄ほどの頭が無かったために受験に失敗した。兄のいない学校がどうにもつまらなく、退屈を埋めるように町中をふらついていた。

少年課の刑事から逃げるように走り回ったり、停めてあったバイクを盗んだり、ゲームセンターに入り浸っているうちに、色んな人間と顔見知りになった。

多分、そう言った連中には中学に上がったばかりの童顔で小柄な自分は可愛らしく見えていたのだろう。とても可愛がられていた。護身のためと色々なケンカの技を教えてもらい、退屈な毎日が少し色を持って見え始めた。

ただ、元々彼らを慕っていた連中には淳司は少々目障りだったようだ。

ある時、暗がり連れ込まれリンチをされかけた。
今思うと、それがきっかけだったのだろう。

淳司は初め相手が何をしようとしているのか理解できなかった。それまで集団による暴力に縁のない暮らしをしていたからだ。ただ、彼らの鋭い眼差しは、実母が兄に向けていた視線によく似ていた。面白がるというよりは、何かの捌け口になっているような暗い感情を孕んだ瞳。

瞬間、背筋にヒヤリとしたものが走ったのだけ強く覚えている。気が付くと淳司はぼろぼろの状態で立っていた。自分もぼろぼろになっていたが、相手の方がもっと酷かった。

自分が勝ったのは分かったが、何か達成感があつた訳でもない。それからたびたびケンカをふっかけられるようになった。別に人を殴るのが好きなわけではない。

血や暴力に憧れていたわけではない。

ただ、あつちからケンカを売ってくるから構ってやるだけだ。殴られたそんな顔をして近づいてくるから相手をしてあげるだけ。

馬鹿で大嫌いだけど、イライラした感情のはけ口としては申し分ない連中だった。ちよつと叩いたくらいでめそめそするような連中でもない。

遊び相手としては嫌いじゃない。

つまらない毎日もどこか楽しいものに変えてくれるような気がしていた。

「弱い癖にイキがつてんじゃねーよ、ばあーか」

転がった連中に吐き捨てるように言う。

人を殴る瞬間一瞬わき起こる激しい破壊衝動。

それが満たされて一瞬だけ心が軽くなるのだ。

でも、終わってしまうとすぐ元に戻る。

何もかもが嫌になる。

いつも、中途半端なまま燻って終わってしまう。

それだけが唯一嫌な感情。

いつそ、もう全部終わらせて欲しいと思うのに。

「あれ、今日はちよつとやれるじゃん」

うめき声を上げながら起きあがった男を見て、へらへらと淳司は笑う。

男の手に光るものを見て取った。

「へえ、殺すつもり？ いいよ、やんなよ。出来ればけどね」

挑発するように笑って、胸元を叩いた。

「心臓、ここだよ」

死にたい訳ではない。

ただ別に死んだって構わない気がした。

つまらない毎日。

どうしようもない日々。

学校が変わってしまったことでどんどん離れていってしまう兄と

の距離。

全部、終わらしてくるなら死んでもいい気がした。

「あああっ！！」

叫びながら男が突進してくる。

暴力に興奮して何をしているかも分かっていない男が、ナイフを持って淳司の心臓を狙ってくる。

「……っ」

ぞくりとした。

脳裏に誰かの姿がよぎる。

淳司は反射的にポケットに手を入れ、携帯電話を男に向かって投げつけた。

「！」

がしゃんと言う音と共に一瞬彼が怯む。

ナイフを持っている手を掴み、腕を折るつもりで乱暴に振った。

男がナイフを落とす。

地面をナイフが転がった。

回転する。

脳裏に浮かぶのは留紺色の着物と赤い風車。

「……っ」

思考を断ち切るように淳司はナイフを掴んだ。

温く残る人のぬくもりと、妙に湿ったグリップが急激に現実へと引き戻してくる。

「こういつのつて、正当防衛じゃなくて、過剰防衛になるんだっけ

？ それとも殺人罪？」

「あ……」

今まで自分を殺そうとしていた男が青い顔でこちらを見上げている。

力もなく、喚くだけ。怯えて何も出来ない醜い塊。

それは過去の自分の姿と重なる。

何も出来ない自分自身と。

「人にナイフ向けるってどういう意味か知ってる？ ……殺されても良いつて言う意味だよ」

声が乾く。

淳司は男の顔にナイフを向けた。

もういい。

終わらせよう。

「なあ、殺してもいいよな？」

感覚が麻痺をしてくる。

罪悪感なんてとつくの昔に無くなっている。

あるとすれば一つだけ。

どう頑張っても兄の支えになれない自分自身に対して。

「淳司っ」

不意に叫ばれた声で我に返る。

手元からナイフが奪われ、遠くに投げ捨てられた。

ぱちん、と高い音が響く。

叩かれた事を自覚するまでに少しだけ時間が必要だった。

「何で……」

声が掠れる。

言いしれぬ恐怖と締め付けられるような胸の痛み。頬が激しく痛んだ。

何でここにいるのだろうか。

一番逢いたくて、一番見られなくなかった人。

「何で、兄さんが……」

彼は淳司から故意に視線を逸らし、ナイフを持ち出した男の方を見る。びくりと男が震えた。

背を向けしやがみ込んだ兄が怖かった。

遠ざかっていきそうな背中。

こんな汚いところを見られたら今度こそ嫌われてしまった。

「これはケンカの領域を越えているな」

「……ひっ」

兄の口から小さく息が吐き出された。

「すまないな、両成敗……というのも変だが、今回は不問にして欲しい」

抑揚のない低い声には有無を言わさない何かが含んでいる。

彼が酷く腹を立てていることを理解して淳司は身を固くする。他人からして見ればいつもと変わりないかもしれないが、淳司には分かる。兄は今、珍しいほどあからさまに怒っている。

相手がこくこくと頷くのを確かめて携帯電話を拾い上げ修司は立ち上がった。

視線が交わる。

怖い。

淳司は視線を故意に逸らす。

ため息が、大きな手のひらと共に頭の上に振ってきた。

「淳司」

声音に含む優しい色を聞き取って淳司は頭を上げる。

修司は困ったように小さく笑う。

「帰るぞ」

「……………」

伸ばされた手を握り返す。

握った手の平は冷えてどこか汗ばんでいた。

一つ上の兄修司は何でも器用にこなせる人だ。

勉強も運動も、何かが誰よりも優れている訳ではないが全てが上位に入る人だ。たとえばテストでどの教科も一位になっていないにも関わらず、総合で一位をとってしまうような人というべきだろうか。運動も選手になるほどの成績はないが、体力測定では異常な程安定的な記録を出す人なのだ。一つのことが誰よりも出来る訳ではないが、どれかが苦手という訳でもないために非の打ち所がない。ただ少しだけ人と喋るのが苦手で、そのくせ他人を考えすぎて自分がおろそかになるようなところが欠点と言えるかもしれない。いつも比べられる。

一つしか年が離れていないせいでもいつも淳司と修司は比べられた。修司は出来のいい兄、自分は出来の悪い弟。

それを嫌だと思ったことはない。

兄が自分の出来の良さをひけらかし馬鹿にするような人なら劣等感を抱いて反発もしただろうが、修司にはそんなところの欠片もないし、何より淳司は修司が何故「出来る人間」なのか知っている。

修司は別に生まれながら何でも出来る訳じゃない。数年前に亡くなった実母に厳しく躰られた為に出来ざるを得なかったのだ。

小早川という名家から鷹取に嫁いだ母・都は自分自身が厳しく育てられた為に長男に対して同じように過剰な躰をしていた。三人いる兄妹の中で何故か兄だけがいつも厳しくされる。完璧を要求され、修司はそれに答えようと必死になってそれなりの結果も出してきた。それでも母が兄を褒めていた記憶はあまりない。淳司はそんな兄を見ながらも母親が怖くて反発することが出来なかった。

それでも修司は自分たちに優しくかった。自分ならば、都合のいいときだけ近づいてきてふざけるな、とあたってしまうかも知れない。

それでも兄は自分たちに無条件で優しくかった。

争うと言うことを知らない人。

かなわない、と思う。

どんなにケンカが強くて、この人だけには敵わない。

「……怒ってる？」

問いかけると兄はようやく自分が淳司の手を強く握ったまま引いていたことに気付いたのだろう。

手を離し、少し考え込むようにしてから答える。

「創立記念日だった」

答えになっていない。

だが、これが兄のしゃべり方。

「本を買いに出たら、お前が人とどこかに行くのが見えた。尋常なようには見えなかった。走ったが見失って、気が気じゃなかった」

「……………うん」

「心配した。弟が怪我をするのも、怪我をさせるのも俺は嫌だ。…

…刃物は特に駄目だ」

「ごめんなさい」

「何事も無くて良かった。……叩いて悪かった」

「……………ごめんなさい」

暴力とは無縁な人。

だから、淳司を叩いただけで自己嫌悪しているのだろう。自分のことで、この人が気に病むことはない。あのくらいのこととはされて当然なのだ。

何で自分はこの人に迷惑しかかけられないのだろう。

兄は自分に沢山のことをしてくれる。

それなのに、淳司が返すのは迷惑だけだ。

兄のことが好きだ。

誰よりも愛している。

なのに自分には兄から愛される価値もない。

からから、と何かが回転する音を聞いて淳司はぎくりとする。

見上げたマンションのベランダに、カラカラと回るガーデニング用の風車がある。風に回されたカラカラと音を立てていた。

「……………」

「どうした？」

脳裏に浮かぶのは留紺色の着物を着た人と、赤い風車。

ぞくりとして、淳司は首を振る。

「……………何でもない」

「大丈夫か？ 怪我でもしているのか？」

「大丈夫、俺、強いから。あの程度じゃ怪我なんかしないっての」

「頼むから、少し控えてくれ」

言われてちくりと胸が痛む。

兄はケンカをよく思っていない。淳司が人に迷惑を掛けるようなことをすれば本気で叱る。けれど、淳司は繰り返す。

そうまでして兄の気を引きたいのか、と問われれば否と言うだろう。

兄には自分のあんな薄暗い性質を知られなくなかった。修司がケンを仲裁に来ることは度々あった。だから、暴力的な面を知らない訳ではない。けれど今日のように一方的に人を殺そうとした淳司を彼は見たことが無いはずだ。

ああいった衝動が自分の中にあるのを淳司は知っている。暴力が嫌いな兄はそれを嫌悪するだろう。だから見られなくなかった。

それでも兄は、刃物は駄目だと諭しただけだった。

どう思っているのだろう。

兄は、あんな淳司をどう思っただろうか。

「淳司」

声を掛けられ、びくりと淳司は肩を震わせる。

幸い兄は見ていなかった。

「な、何だよ」

「帰ったら、大切な話がある。……………俊江さんと顔を合わせるの嫌だろうが、一緒に夕食を食べよう」

強制力もない言葉だが、兄のこついった言葉に淳司は逆らえない。
淳司はうん、と頷いて見せた。

夕食を家族だけで取るのは珍しいことだ。

鷹取の家に住む人は家族だけではない。鷹取家は屋敷と呼べるほど家も広い。古くから続く着物問屋であり、小千谷紬の染色から着物の販売に至るまで全て昔ながらの製法で行っている。また着物に関連した店も多く持っている。今でこそ製造に関しては規模は少しなくなつたものの、この辺りの町は鷹取の家によつて栄えたとも言える。下請けの仕事をする職人達が集まっていた事もあつたように、コンビニが普通にある現代になつても未だに年寄りには鷹取を「お屋敷様」と呼ぶ。住み込みで学びに来た人や客などがいることが多く、家族だけになることはあまりない。

最近には特に淳司が義母である俊江を嫌つて食卓に出ないために、家族全員が揃うのさえ珍しかった。

今日、家族だけの食事になつたのは、兄が父親に行つてみんなを集めたからだろう。

「それにしても、淳兄がいるなんて珍しいよね」

都志子が少しかいかいを含んだような口調で無邪気に笑う。

三つ年下の妹、都志子は都が生んだ三兄妹の一番末だ。おっとりしたところはあるが、可愛い妹だと思つている。

「おれも、久しぶりに会つた気がする」

にへら、とむかつくほど純粹な笑みを浮かべたのは隆俊だ。淳司の六つ年下の弟になる。どんなに邪険に扱つても、犬のように自分に懐く不思議な弟だ。

鷹取の家は少し複雑な家庭環境にある。

実母‘都’の実家は小早川という金沢の古い家の出身だ。身分階級が残つていたら華族と呼ばれるような立派な家であり、政略的な意味で新潟の鷹取家と誼を結びたかつた。当代当主小早川徹也の長女都と、鷹取家の跡継ぎである隆司郎との結婚は本人達のを承も得

ずに進んだ。今でこそあり得ない話だが、その当時はまだ旧家同士の結婚はそういったことが当たり前に行われていた。

当然結婚を果たしたが、結婚生活は上手くいっているとは言い難かった。

結婚して数年後に修司が生まれ、翌年淳司も生まれた。仲睦まじい家族に見えたかもしれないが、少し夫婦の関係は歪だった。

都は完璧主義だった。子供の、特に長男修司への躾は厳しく激しかった。まだ幼子とやっていいほどの年齢の修司に対し、虐待ともとれるような躾が行われた。元来穏やかな性格である隆司郎は注意をしてもますます苛烈になる彼女を疎み、夫婦の関係は少しずつ破綻していった。

都志子が生まれた頃には或いは俊江と関係があつたのかもしれない。都は鬱病を患い、突然事故で死んだ。或いは自殺であつたのではと思う位、母親は病んでいた。

それから暫くして、父親が俊江を連れてきた。

俊江には既に子供があり、誰も何も言わなかったが、その子供が「何」であるのは明白だった。

戸籍を調べれば誰の子であるのかははっきりとするだろうが淳司はそれをしていない。ただ、新しく母が出来て、弟が出来た。それだけのことだ。

「何だよ、俺が居たら駄目なのかよ」

ぶっきらぼうに言う都志子は優しい笑みを浮かべる。

「うっん、私は嬉しい」

「おれも兄ちゃんいて、うれしいよ」

隆俊も無邪気に笑った。

悪い子じゃない、と思う。同じ血を引き継いだ都志子は無条件で可愛い。隆俊も、媚びている訳ではなく純粹でいい子なのだ。

それだけに複雑だ。

この子に流れる血の半分は自分と同じ父のものだろうが、半分はあの女の血を引いている。

ちらりと彼女の方に視線を向けると、義母は少し緊張したような笑みを浮かべた。

「おかわり、必要なら言って下さいね」

「……いらねえよ」

乱暴な口調で言っていると、横の兄が膝元を叩く。

座敷の机を挟んでこちらと向こう側では足元まで見えない。少し顔を伏せた淳司の態度を俊江は別の意味に取ったかもしれない。

それも苛立つ。

少し父が笑って俊江に茶碗を差し出す。

「私は少し頼むよ。中盛りくらいで」

「はい」

少しほっとしたような顔で頷いて俊江は茶碗を受け取る。

茶碗に残っていたご飯を掻き込み、隆俊が茶碗を差し出す。

「おれ、大盛り！」

「少し待っていて、お父さんが先よ」

「あ、私の分、余るかな」

都志子が言っていると俊江は微笑む。

「大丈夫よ。沢山炊いたから。都志子さんも……その、皆さん。沢山食べて下さい」

はい、と淳司以外からの返事がかえる。

家族全員が揃うと少し緊張があるのを感じる。淳司が色々な問題を起こし始めたせいもあるだろうが、それだけではない。

「それで、修司、話があるのだろう？」

本題を切り出され、兄は茶碗を置いた。

「みんなに聞いて貰いたい事があります」

兄は普段、家族に敬語を使ったりしない。時折俊江に対して敬語が混じることがあるが、普段であれば敬語は使わない。ただ、改まった時には言葉を少し改める。

何故か酷く嫌な予感がして淳司は兄を見た。

整って綺麗な横顔には迷いの色は無い。

「俺、横浜の学校に進学します」

え、と都志子が声を上げた。

隆司郎が少し息を吐いた。

「そうか、なら決まったのか」

「はい」

「え、進学って、大学よね？」

都志子の問いに修司は首を振る。

「寮のある横浜の高校だ。全国区で募集している。父さんには前々から少し話をしてたけど、今日進路指導の先生から電話がかかってきて、推薦の内定確定だと……」

「じゃあ、修兄、中学卒業したら家を出るって事？」

「少なくとも高校在学中は横浜の寮に入ることになる。……恐らく、そのまま向こうの大学に進学することになる」

「えっ、家はどうするの？ 修兄、跡継ぎだし……」

「家は俺が継ぐつもりだ。鷹取は大きい。俺一人では難しい事だから、淳司にも都志子にも隆俊にも手伝って貰いたいと思っているけど、他にやりたいことがあるなら強制しない。今は父さんも俊江さんもいる。だから俺が大学出て戻るまで、平気だ」

兄がちらりと隆司郎の方を見ると彼は頷いた。

「修司とも散々話して決めたことだ。確定していないことを話して不安にさせるのはいけないと思って黙っていたが……内定決まったのならば言えば鯛でも用意したのにな」

修司は父の言葉に微かに笑った。

「合格通知が来たらお願いします」

隆俊がぼかんとして兄を見つめ、食事時だというのに這うようにして修司の側まで行く。

「修司兄ちゃん、いなくなるの？」

「暫くの間、な」

「やだよ、なんで居なくなっちゃうの!？」

「……やめなさい、隆俊」

「だって、さみしいじゃんかつ！ 修司兄ちゃん居なくなるなんて、おれ、ヤダかんねっ！」

修司に縋るように抱きつく隆俊を、都志子が宥める。

「タカ、別にお兄ちゃんはずっと居なくなる訳じゃないのよ。勉強しに行くだけで、家から出る訳じゃないんだって……」

「でも、暫くあえないんだよね？ おれ、やだよっ！」

「長い休みの時は、ちゃんと戻ってくる。それに、行くのはまだもう少し先だ。……だから、泣くな」

あまり抑揚のない、それでも優しい声で兄は末の弟に話しかける。

髪の毛を撫でて、甘やかすように身体を抱き寄せた。

頭の芯の方がすうっと冷えた。

まずい、と思うだけまだ理性があった。

淳司は立ち上がる。

兄が視線を向けた。

「……………」

言いたいことを全て飲み込んで、淳司は障子を開けた。

「淳司……」

囁くほど小さな兄の声。

聞こえない振りをしてそのまま外へと飛び出した。

夕食時ともなれば作業場の灯りも落ちている。時期によっては忙しく稼働していることもあるが、今は仕事も少なく、臨時で他の工房から来て貰っている職人もいない。しんと静まりかえった作業場の、まだ仕立てる前の反物の棚の前で、淳司は息を吐いた。

よく飲み込めたと思う。

後少しで叫ぶところだった。

兄がこの家からいなくなると聞いて心臓が止まりそうになった。泣きたかったのは隆俊よりも自分の方だっただろう。彼が先に泣き出さなければ自分が泣いていた。

(それに……)

淳司はぎゅっと胸を押さえる。

鼓動が早い。

嫌な音だと思う。

隆俊が兄に甘えるように抱きつき、兄もまたそれに応じるように彼を撫でた。その瞬間、頭の中が真っ白になった。

それはお前が甘えていい兄じゃない。

そう叫びそうになって淳司は自分の腿を激しくつねった。彼にあたるのは間違っている。兄がいて、兄の優しさを知っていれば誰だって甘えなくなる。それも分かるから、兄に対して行っちゃ嫌だと泣く隆俊を責められない。

ただ、自分はある時猛烈に隆俊に嫉妬していた。

兄の手が彼を撫でた瞬間、隆俊を絞め殺したくなった。

「……絞め殺す……」

不意に嫌な記憶が蘇って、淳司は眼をきつく瞑った。

小さい頃、公園で遊んでいた。

母親の体調が思わしくなく、兄と一緒に外で遊んでこいと言われたのだ。修司が「遊び」を許されるのは滅多にないことだった。だ

から、目一杯兄に遊んで貰おうと淳司は張り切っていた。近所の友達を集めて、かくれんぼをしようとみんなが散った。

あの時、選んだのがかくれんぼじゃなく鬼ごっこだったら良かったのかもしれない。

一人になった兄は、淳司が少し離れた間に襲われたのだ。

かくれんぼなどろくにしたこと無い兄が隠れ場所に迷っているんじゃないかと心配になって戻った時だった。

小柄な大人が兄にのしかかっていたのだ。

兄さん、と叫んだ声に驚いたのか、大人はすぐに逃げていった。

兄さん大丈夫、と駆け寄れば兄は咳き込みながら掠れた声で、このことは誰にも言うな、と強い口調で言った。

ずっと、兄を襲ったのは鷹取に恨みのある人物で、兄が黙っているように言ったのは二度と外へ出してもらえなくなるのを怖がったからだと思っていた。だから母親の耳にだけいれないようにこっそりと父にだけ話をした。父親は難しそうな顔をしてから、もう襲われることはないよと兄が心配で泣きじゃくる淳司を撫でた。

淳司の思いこみが違つと分かったのはつい最近だった。

「淳司」

「……兄……さん」

作業台に寄りかかりながら淳司は笑う。

「どうしてここだって？」

「淳司は小さい頃、俺とケンカすると、よく田辺さんの足元に隠れていた」

「兄さんとケンカした訳じゃなくて、俺が一方的にわがまま言って感情的になって切れたただけだろ。今日は言葉すら交わしてない」

「でも、ここに来る時と同じ顔をしてた」

兄が近づいてくる。

暗がりの月明かりに照らされた兄の顔は綺麗だ。漆黒色という言葉がよく似合う綺麗な黒髪に、黒に見えるが微かに青い虹彩。両方とも実母から譲られた色だった。兄は兄弟の中で誰よりも母親に似

ている。

性別と性格意外は良く似ている。

「話がなかなか出来なくて、すまなかった」

「……どうせ父さんが黙ってろって言ったんだろ。あのジジイ、いつも大事なことを話すの後回しにするから。再婚の時だってそうだ」
「母さんが死んでそれほど経っていないから迷っていたんだろ。世間でどんな噂を立てられるか分かったもんじゃない」

本妻が死んで、後妻が子連れで入ったとなれば悪い噂だって出てくる。口に出して言うも憚られるようなそんな憶測だってあるだろう。淳司も俊江と初めて会った時、苦労するだろうなと思った。

父親の浮気を責める気はない。あの母を妻にするしかなかったのだ。むしろ同情さえする。俊江もいい人だと思う。よく頑張っていると思う。だから、鷹取の内に近い人ほど俊江を悪く言わない。むしろ母がどれだけ周囲に疎まれていたのか分かった。

ただ、淳司は俊江が許せない。

兄がどんなに否定しても、淳司は俊江のことを許すことは出来なかった。

「いい迷惑だよ。心の準備なしで聞かされるこっちの身にもなれっ
ての」

「……悪い」

「兄さんが謝ることじゃない。でも、どうして横浜の学校だったんだよ。兄さんの夢は知ってるけど、横浜じゃなくなっただけでよかっただろ」

言う兄は少しだけ言葉を詰まらせる。

「あの学校は多彩だ。俺の学びたいことを全部学べると思う。……
あと、寮があった」

「……寮？」

「今は少し俊江さんと距離を置きたかった」

「……何だよそれ」

「今は少し、顔を合わせない期間を持ったほうがいいと思うんだ」

「なんだよ、それっ！」

淳司は拳を握りしめて作業台を叩く。
かたかたと壁が鳴った。

「だったら、あの女が出てけばいいじゃないか。兄さんは何にもしてないのに、勝手にびびって兄さんに、'だけ' 近づかないのはあの女のほうだっ」

「条件が合う学校があった。俺も頭を冷やしたい。丁度いいと思う」「ふざけんなっ！」

手近にあった出しっぱなしの針山を兄に向かって投げつける。針山は兄の肩にあたって落ちた。

「…………俺を置いていくのか？」

「淳司…………」

「俺をここに置いて、兄さんは逃げるのかよ!？」

「淳…………」

「そんなの、俺は認めないっ！」

右手に裁ちバサミが当たる。

淳司はそれを握り込んだ。握り込んだまま兄を作業台の上におし
たおした。

振動で横の棚から留紺色の反物が落ちてくる。

「俺は…………兄さんが出て行くなんて、認めない」

ハサミを持つ手が冷たい。

ハサミを開いて刃の部分を兄の首元に近づけると、兄は無表情で淳司を見上げてくる。抵抗はしなかった。

淳司はその顔を愛おしい気持ちで見つめながら笑う。

「……………ハサミでも人は殺せるんだ、兄さん」

「……………」

「大丈夫、後から俺も行くから。兄さん一人にはしないよ。そうだよ、最初からこうすれば良かったんだ。こうすれば誰にも兄さんを取られない」

殺して、食べて自分も死のう。

そうすればもう、にいさんをだれにもうばわれない。

「淳司……………」

怯える訳ではない。

それなのに兄の声は僅かに震えていた。

「淳司、やめるんだ。刃物は冗談にならない」

「……………冗談で兄さんに刃物向けたりしないよ」

「なら、なおのこと駄目だ。俺の為に、お前の人生を無駄に使う必要なんてない」

「無駄？」

笑いがこみ上げる。

彼は何も分かっていない。

自分にどれだけ価値があるのか。

自分がどれだけ淳司に愛されているのか。

「無駄なんかじゃないよ。兄さんは何も分かってないよ。自分のこと、何も分かってない」

「……………俺を殺した所で、俺はお前のものにはならない」

「……………っ！」

「俺は俺で、お前はお前だ。人である以上、殺して所有しても誰かが誰かのものになるわけじゃない。せいぜいその骨が所有物になるだけだ」

手元が震える。

「……死ぬの嫌なの、兄さん。苦しいことばかりだったのに、まだ生きていたいんだ？」

死んだ方が幸せじゃないんだろうか。

厳しい睨をされて、殺されかけて、新しい母親からも疎まれて、最近では殆ど笑わなくなった。時々思い出したように笑みを作る事はあるが、殆ど笑わない。

そのくせ人にだけは馬鹿みたいに優しい。

「淳司、俺は……」

がたん、と音を聞いて淳司は視線を向ける。

向けた先に、驚いた表情の俊江の姿。

全身が一気に栗立った。

「……………」

「淳司っ！」

動いた淳司を兄は止めるために動いた。ハサミを持った腕を捕まれ、くるりと返された。気が付けば二人の位置は入れ替わっていた。作業台に縫い止められ身動き出来なくなっているのは淳司の方だった。

抵抗しようもがくが、兄は人がどうやったら身動きを取れなくなるのかを知っている。無理に動かそうとすれば淳司の身体に激痛が走る。

「離せっ、殺してやるっ、あの女だけは、俺がっ……………」

女と目線が交わる。

父の後妻となり、自分たちの母親になった女は青い顔で口元を押さえている。怯えきった顔。

自分だって同じような事をしたのに、よくそんな顔が出来ると淳司の胃の底が燃え上がったように熱くなる。

「……俊江さん」

兄が小さく言っていると彼女はびくつと肩を震わせる。

誰が誰から誰を守ろうとしているのか。

理解出来ない訳ではないだろう。それなのにあの女は、兄に一番怯えている。

「ただの兄弟喧嘩だ。……大丈夫だから」

立ち去ってくれ。

言外に含まれた言葉を察知したのだろう。俊江は泣き出しそうな顔をして口元を押さえ、廊下をバタバタと音を立てて走り抜けた。

「離せ、兄さんっ！ あいつが、あいつが全部悪いんだっ！」

「違う」

「あれは、兄さんを殺そうとしたんだっ！」

「……違うっ」

「違わねえよ！ 罪悪感以外に、兄さんに怯える理由あるのかよっ！？」

「淳司っ」

急に抱きしめられ、淳司は思考を止めた。

身体が震えている。

兄の身体か、自分の身体か。或いは両方か。

ただ修司は強く淳司の身体を抱きしめる。暖かく、肩を掴むように抱きしめる手だけが少し冷たい。

目元が熱い。

ごとんと、裁ちバサミが床に落ちた。

「俺のためにお前が傷付く必要なんかない」

「……俺は別に傷付いてなんか」

「……俺は去年の剣道の大会の時、‘突き’で失格になった」
急に何の脈絡もなく始まった話に淳司は聞き入る。

兄は去年まで剣道をやっていて。大会に出るほど強い人だったが、中学の剣道では禁止されている突きをやって失格になってから、剣道を止めた。元々武道は都が「文武両道であるべき」と言っ

せていたもので、母の死後も兄は続けていた。本人は惰性で続けていただけと言ったが、剣道を止めた時の兄は肩の荷が下りたようにほっとしながらも何かを失ったような喪失感を覚えている顔をしていた。

「あの時俺は、対戦相手を殺そうと思っていたんだ」

兄の口から聞いたこともない単語に淳司は少し瞬いた。

「……あいつ、直前で兄さんに因縁付けて来た奴だよな？」

修司は淳司を抱きしめたまま頷く。

「お前が俺の邪魔になるような、大会有力者を潰してきた、そう言った」

「兄さんが大会で上位入っているの、他の候補潰したからって？」

馬鹿じゃねえの？ 剣道って気持ちを鍛えるものじゃねえのかよ」

趣味の悪い冗談だと思う。

兄は淳司がそんなことをしなくても強い。手袋をしても手が凍りそうな新潟の冬の朝も、兄は欠かさず素足で稽古をしていた。文と武、両立させるために色々な者を犠牲にして基礎を作ってきた。その努力を知らない人は簡単に兄を「恵まれた才能」と言う。才能という言葉にすら嫉妬した相手は有りもしないことを悪し様に言う。

それでも兄は怒らない。

「もっと酷いことも彼らは言った」

「……俺のこと？」

うん、と頷いたが、兄は相手がどんなことを言ったのか語らなかつた。よほど酷い言葉だっただろう。不器用で優しい修司は心を痛め憤った。

「ある意味、それは勝つために俺に有効な言葉だったと思う」

「……」

「向かい合った一瞬、相手に殺意を覚えたのは事実だ。……俺は、その殺意が、怖かった」

だからわざと突きを行って失格になったのか、それとも咄嗟に突きが出てしまったのか修司は言わない。

ただ、剣道を止めた後の修司の表情の意味が未練ならどちらかなのかはつきりしている。

「誰かを憎む気持ちは重い。だから、淳司にはそんなのを背負わせたくない。憎しみで人を傷つけたら、自分はもつと痛い」

「……俺は、兄さんのためなら、兄さんだって殺せるよ。他人なんか、もつと簡単だ」

「俺が望まなくても？」

耳元で囁かれた言葉に淳司は言葉を失う。

「……」

「俺は、お前が大切だ。お前が傷付くを見たくない。俺は、そんなの望まない」

「俺は兄さんの為なら、何したって傷付かないよ」

「じゃあ、何で泣いてるんだ？」

「それは……」

「俺は、お前には俺の為じゃなく、自分のために生きて欲しいと思ってる」

「兄さん……」

ああ、そうか、と唐突に理解した。

兄が距離を置こうとしているのは俊江だけじゃない。淳司とも距離を置こうとしているのだ。

淳司は修司しか見えない。修司だけいればいいと思っている。歳を重ねる事にそれは酷くなる。

離れてみて、自分以外を見る、そう言っているのだ。

「俺は横浜に行く。逃げる気持ちは少しあるかもしれない。だが、お前を置いていくわけじゃない。必ず戻ってくる。母さんのように、いきなり居なくなったりしない」

力が抜ける。

兄は抱きしめる手を緩めて、淳司を椅子に座らせた。

修司は床に落ちた留紺色の反物を拾い上げた。

「……それ」

「ああ」

「母さんの着物の色だ」

「そうだな。母さんはこの色を一番好んでた。一番深い完璧な紺に、落ち着いた乱菊が織り込まれた着物だった」

「母さんの事、怖かったけど、着物は好きだった。趣味のいい人だったから」

「俺もそう思う」

本当に趣味のいい人だった。

派手な着物を好んだ人ではないが、かといって地味にも見えなかった。着こなしも選び方も綺麗な人だったのだ。自分に似合うものをよく知っていたのだらうと思う。

「時々母さんの夢を見るんだ」

淳司は床に落ちた裁ちバサミを見つめながら呟くように吐いた。

「最初はあの女が追い掛けてくる。怖くて逃げ出して、途中で振り返ると、相手は留紺色の着物を着ているんだ。……あの女は、そんな色の着物を着ない」

追い掛けてきているのは母だと気付く。

恐怖のあまり、兄を求めて手を伸ばして、兄に手が届かないこと絶望する。それでも迫ってくるのが母であると気付いた時、その手が兄に届かないことを安堵する。

「母さんは兄さんを殺しに来るんだ。母さんが追い掛けてるのは俺じゃなくて……兄さんの方」

母の興味の対象はいつも兄だったと思う。

小さな子供はどんなに虐待されても母親が「絶対」なのだという。母親の笑顔が欲しくて怯えながらも気を引く努力をするという。期待に込めようと努力するという。兄は確かにどこかそう言うところがあった。

自分がどうなのか、を考えると良く分からなくなる。

母親は自分を見ていない。

何かがあれば修司が付いていくのが当たり前で、淳司は置いていかれるのが多かった。羨ましく思わなかった訳じゃない。兄ばかり何故と思った事もある。ただ、兄に対する行きすぎた「羨」を見れば、母に近づきたいとは思えなかった。無視されている方がずっといい。

兄の顔を見ると、自分が代わりになれればと思った。でも、母を見れば怖くて竦んでしまい、結局自分は何も出来なかった。

「……母さん、自殺じゃないよな？」

口にすると脳裏に赤い風車が浮かぶ。

母親の象徴。

そして、死の象徴。

「母さんは事故死だ」

「本当に？」

「……」

修司は答えない。

分かっている。彼もまた事故が自殺だったのではないかと疑っている。あの頃は、みんなが不安定だった。精神を病んでいた。だから、事故がわざとではないと言い切れない。

「俺、母さんに似てるんだ」

「……」

「俺は母さんの狂気を多分知ってる」

何をやっても満たされない。

だから少しでも満たされたという快感を覚えればそれに溺れる。あとで自己嫌悪に陥ることを知っていても止めることは出来ない。そうしなければ辛うじて繋がっている理性が切れて無くなってしまう。いそうだからだ。

ケンカに明け暮れる時の自分と、修司を叱る母の姿は似ている。

淳司は、自分の中にある「母と同じ部分」を嫌悪している。

似ている部分を見つけると、風車を思い出す。

母は赤い風車を庭飾りとして飾っていた。古くなれば取り替えて、いつもどこかで赤い風車が回っている。何故、母が赤い風車にこだわったのか淳司は知らない。ただ、母の死を知らせるように、あの日、淳司と修司の目の前で強風に舞い上がった風車は鈍色の空を見た後、庭の池に落ちた。

二人が拾い上げようと、道具を探しに家の中に入った時、電話が鳴った。

それは、母の事故と、母の死を知らせる電話だった。だから淳司にとって風車は母の象徴であると同時に死の象徴でもある。

「いつか、俺も母さんと同じ事をしそうで怖いんだ」

いつか、自分で自分を殺したくなる。

その日が来そうで怖い。

いや、もう、既に自分で自分を殺したくなっている。

「……淳司」

「だから……兄さんに側にいてほしい」

修司だけでいい。

側にいてくれれば、それだけでギリギリの理性が保たれるから。

「……それじゃあ、駄目だ」

溜息混じりの兄の声。

優しい手のひらが淳司の上に降りてくる。優しく髪を撫でる手。

この人が淳司のことだけを考えている時の仕草。

「それじゃあ、いつか駄目になる」

「いつか、じゃなくてもうそこまで迫っているんだっ！」

淳司は身を固くして目を瞑った。

「今、兄さんが居なければ、俺、本当にあの人を殺しちゃう。さっきだって、本気で殺せると思ったんだ。飲み込もうとすれば、今度は自分を殺したくなる。だから……だからっ！」

「淳司なら大丈夫だ」

「……」

「俺は抵抗しなかった。それでも淳司は俺を殺さなかった。だから大丈夫だ」

「根拠がないよ」

「俺は信じてる」

淳司は縋るように修司の服を掴んだ。腹部に頭を押しつけると、彼の熱を感じる。

「本当に駄目なら、俺の所に来ていい。だから、少しだけ、頑張ってみないか」

言われて逆らえる訳がない。

押し出すように、淳司は言う。

「ずるいよ……」

「ああ」

「兄さんは、ずるい」

「……すまない」

兄の言い分の方が正しいことは十分解っている。自分がわがまを言っていることも、そのわがままの為に兄の夢を捨てさせる事が間違っている事も分かっている。

それなのに、どうしても駄目なら、と淳司に逃げ道を用意した。

そこまでされて、否と言える訳がない。

「……深夜でも電話するぞ」

「ああ」

「休みじゃなくなつて会いたいと思つたら、会いに行くから」

「ああ」

「授業中でも構わず乗り込んでやる」

「……それは」

少し困つたような兄の声。

淳司は笑う。

「嘘、冗談。人に迷惑かけることはしないよ」

「ああ」

「……俺に何も言わずにいなくなつたりしたら、殺すから」

修司が守ろうとした全てを。

「そんなことは、俺がさせない」

「なら、ちゃんと俺を止めるよ」

「……ああ」

修司ははつきりと頷いた。

「淳司」

「……なんだよ」

修司が真つ直ぐ視線を向けてくる。

真摯な瞳だった。

「俺はお前が人を傷つけたり迷惑かけたりしたら怒る。……でも、俺はお前を嫌つたりしないから」

「……」

「俺はお前の味方だ」

淳司は声をたてて笑った。

笑い出すと止まらなかった。けたけたと声を立てて笑う淳司に、修司は戸惑ったような視線を向ける。

袖口でみつともなく涙を拭きながら、淳司は兄の腰をぎゅっと抱きしめる。

「ほんと兄さんって……」

ずるいよ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7818t/>

まほろば（鷹取家の話）

2011年6月10日04時10分発行